

第20分科会 11月4日(月・祝)実施

第20分科会「障害児・障害者の教育と福祉」は11月4日に昨年同様ハイブリットで実施しました。

今年度の研究課題には新たに「」を入れました。これまで「青年期」については高等支援学校から卒業後の生活について討議してきましたが、高齢

障害のある方たちのライフステージを障害を通して考えることは、

今後、福祉分野のレポートを通して深めていくことが望まれます。

3つの分散会に分かれて実施しましたが、それぞれ3本ずつ計9本のレポートについて討議を行いました。

学校現場だけでなく、卒業後の方たちについてのレポートでは今の教育の在り方について考えるきっかけとなりました。豊かな卒業後を目指して教区活動を行っていますが、単純な「できる力」を伸ばすこと、卒業後に『困らない』ことがクローズアップされ、本当に子どもたち、障害のある人たちの「ねがい」に沿ったものになっているのかどうか。乳幼児期から高等部卒業後までをしっかりと見通しながら「豊かさとは何か」をもう一度問い直す必要があると思われま

一方、障害のある子どもたちに寄り添いながら豊かな実践を積み上げているレポートも多数だされました。「問題行動」でくくってしまうのではなく、その奥底にある「ねがい」「おもい」をくみ取り、地域資源を活用しながら取り組んでいる実践にはやはり元気をもらうことができます。視点を転換して、子どもたちの立場に立って物事を捉えることの大切さも再確認しました。

一人一台端末の仕様などで、「個」が強調される風潮があったり、対人関係にトラブルがあるとどうしても個別での学習に取り組みがちですが、そのなかでも「集団」を大事にしようとする取り組みもあり、翌日からの実践のヒントともなりました。

今年度も教育条件に関わるレポートがありました。レポート筆者は「マニアックなレポート」と言います

が、私たちの実践を支えるために教育条件整備は必須です。予算の縮小で教育条件はどんどん引き下げられていますが、そうした動きに目を向け、抗っていくことの必要性を感じたレポートでした。

20分科会は「障害児・者の教育と福祉」ですが、インクルーシブ教育の流れもあり、通常学校で学ぶお子さんたちも増えています。また特別支援学校（支援学級）の不登校の問題もあります。今後は様々な立場の方たちとつながりながら、議論を深めていけたらと思っています。